

【基礎編】

I 必要な携帯品

- ①帛紗（ふくさ） ②懐紙（かいし） ③扇子（せんす） ④菓子切（かしきり）
※洋装の場合はこれらを入れる⑤懐紙入れ（帛紗挟み）



① 帛紗（ふくさ）

帛紗、服紗、あるいは尾州有楽流では和巾とも言います。

お点前のときに茶器や茶杓を清めたり、多岐にわたって使います。濃茶のさいに茶碗に添えて出す「出帛紗（だしふくさ）・替和巾（かえわきん）」というものもあるので、これに対して、「使い帛紗（使い和巾）」とも言います。

尾州有楽流ではもともと羽二重地（薄い絹布）で九寸五分×九寸のサイズのものを使用していましたが、今はそんなものは市販されていないので、千家系で使用されている塩瀬地（厚い絹布）を裱仕立てにした八寸八分×九寸（約 27.5cm×約 28cm）のサイズのものを使用します。

色は男女とも紫色です。

購入する場合は、化繊（ポリエステルなど）と正絹のものがあるので、必ず正絹にしましょう。

7号(25g)・8号(30g)・9号(33g)・10号(35g)と号数で分かれていて、号数によって重さ、そして帛紗自体の分厚さが異なります。もちろん、号数が大きいほうが(分厚い方が)値段も高いです。

お稽古用ならば7号~8号でも充分ですが、あまりペラペラの帛紗を使っているのを千家系の茶人に見られると猛烈に馬鹿にされるので、お茶会等のときのために9号~10号の帛紗も買っておくのをお薦めします。

あと、汚れたり草臥れた帛紗を使っているのは、人前で伸び切ったシミだらけのTシャツを着ていても平気な人と同類だと思われるので、ぜひとも定期的買い替えるのをお薦めします。

★汚れても絶対に帛紗を洗ってはいけません。風合いがまるっきり変わってしまいます。

さて、販売店で平積みで売ってあればいいのですが、たいていは千家系の畳みかた(※尾州有楽流の畳み方とは別、後述)で四つ折りになって売られています。(作家物の高い帛紗になるほど、最初から箱に入っているの、千家式の四つ折りになっています。)

最初から千家式の畳みかたになっていたなら、仕方がないので、そのまま千家式の畳みかたで使っていくしかありません。ただ、真台子といった最頂点のお点前をするとき以外は、千家式の畳みかたの帛紗を使っても全く支障はありません。

なお、帛紗を畳むときは「わさ(輪)」を目印にします。正方形の三方は縫い合わさっていて、縫い合わせのない一边を「わさ(輪)」と言います。覚えましょう。

そして、畳んでいない形状から、四つ折り・八つ折りに畳むときは、千家だろうと尾州有楽だろうと、まずワサが左になるように置きます。



《表千家の折り方の場合》

ワサが右にある状態から、左辺を右辺（ワサの辺）に持ってきて左辺と右辺を合わせます。今度は、下辺を上辺に持っていきます。そうすると、四つ折り。

※この状態（四つ折り）から腰に付ける場合は、右上の角（ワサになっているはず）を右手で取って自然に持ち上げ、対角の角を左手で取って三角を作り、横にして、左右の手を手前に持ってきて合わせて右手に持たせて腰（帯や袴の紐）に挟みます。

四つ折りの状態で、また左辺を右に持ってきて左辺と右辺を合わせます。そうすると、長方形の八つ折り。懐中したり懐紙入れに入れる場合は、この八つ折りです。

※この状態（八つ折り）から腰に付ける場合は、右上の角の、上から三枚目（ワサになっているはず）を右手で取って自然に持ち上げ、後は四つ折りからと一緒に、対角の角を左手で取って三角を作り、横にして、左右の手を手前に持ってきて合わせて右手に持たせて腰（帯や袴の紐）に挟みます。



《尾州有楽流の折り方の場合》

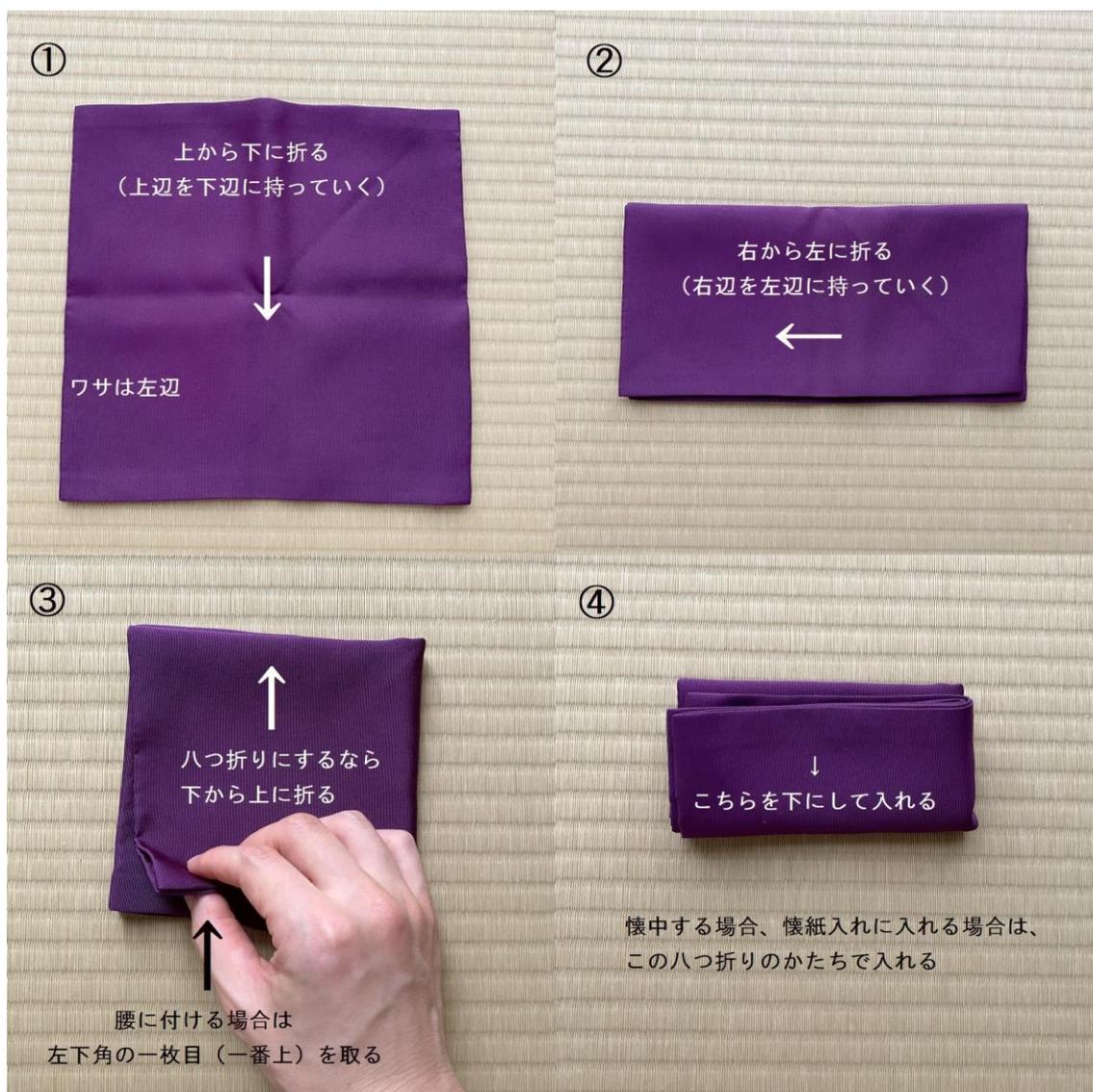
ワサが左にある状態から、上辺を下に持ってきて上辺と下辺を合わせます。要は、上から下に折ります。

今度は右边を左边に持ってきて合わせます。要は右から左に折ります。そうすると、四つ折りになります。

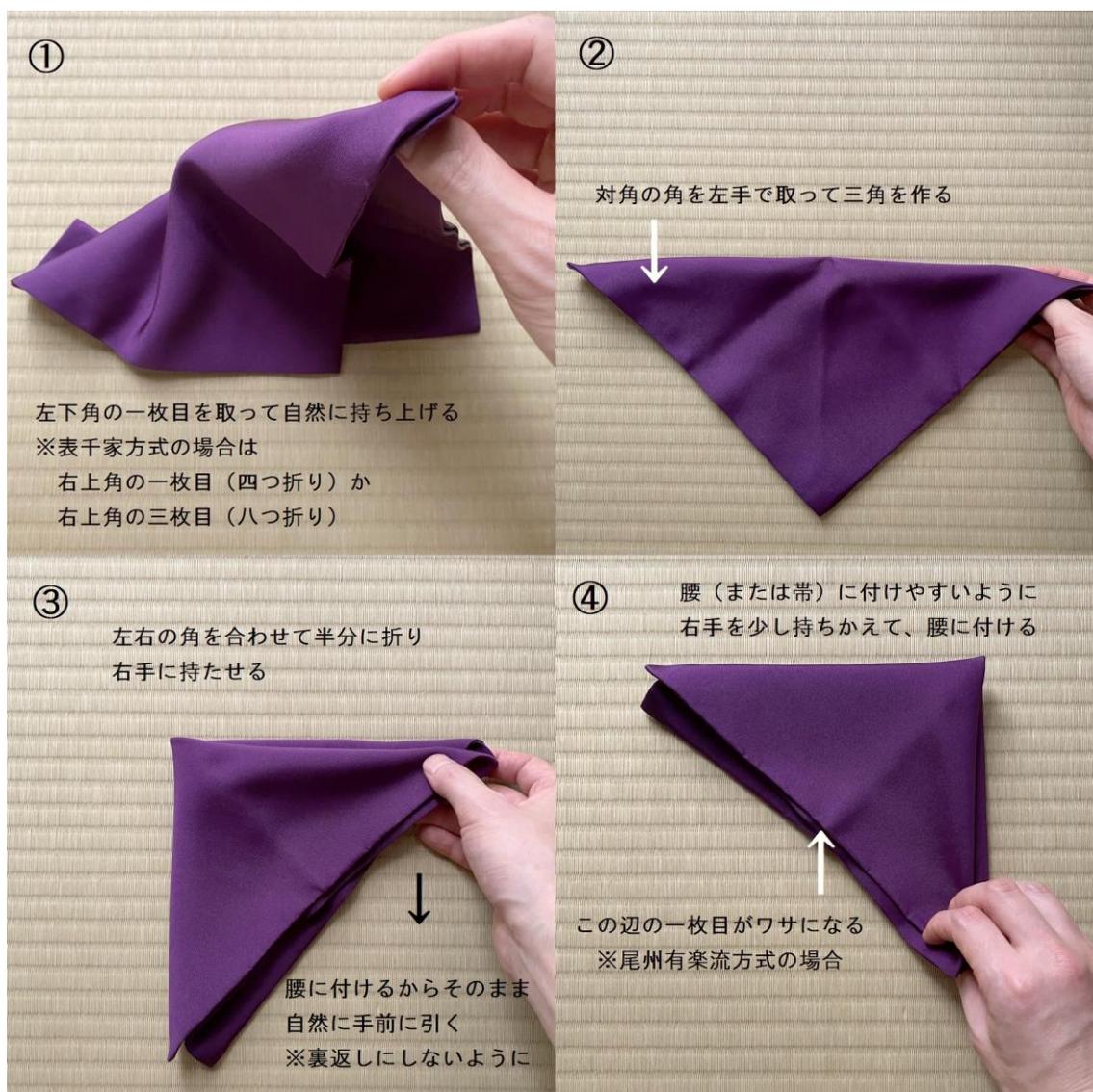
※この状態（四つ折り）から腰に付ける場合は、左下の角を右手で取って（親指を下、人差し指を上にしてつまむ）自然に持ち上げ、対角の角を左手で取って三角を作り、横にして、左右の手を手前に持ってきて合わせて右手に持たせて腰（帯や袴の紐）に挟みます。

四つ折りの状態で、下辺を上辺に合せるように折ると（下から上に折ると）八つ折りで

※八つ折りの状態から腰に付ける場合は、開いて四つ折りの状態に戻して、上記の四つ折りの状態からの付け方で付けるとよいでしょう。



※腰への付け方の写真↓（四つ折りの状態で左下角を自然に持ち上げ、対角の角を左手で取って三角を作り、横にして、左右の手を手前に持ってきて合わせて右手に持たせて腰（帯や袴の紐）に挟む）です。撮影の都合上、右手だけでやっていますが、実際は左手も使います。



男性の場合は、袴の右の下の紐、袴を履いていなければ帯の右側に、右手で持っている帛紗の角を下から上に通して付けます。（洋装の場合は、ベルト等に、下から上に通して付けます）

女性の場合は、帯の右側に、右手で持っている帛紗の角を上から帯のなかに押し込んで付けます。

お客などの場合は、八つ折りの状態で懐紙入れのなかにワサ（全体の折目）を下にして入れておくか、着物ならばやはりワサを下にして懐中しておきます。

②懐紙（かいし）

お菓子をのせるなどさまざまな用途に使う紙です。

江戸時代以前は茶道に限定されたものではなく、ある程度の階層以上の人は誰でも、いまのティッシュペーパーやハンカチのようなものとして、懐（ふところ）に入れていた紙です。

《正式な懐紙》※但し男性用

江戸期以前は身分によって使う懐紙の大きさが異なっており（身分が高いほど大きい）、尾州有楽流では尾張藩の武家階層が使っていた懐紙を踏襲して、正式な懐紙としています。

奉書紙を半分に切ったものを四つ折りにしたもので、それを五枚ほど重ねて懐中します。

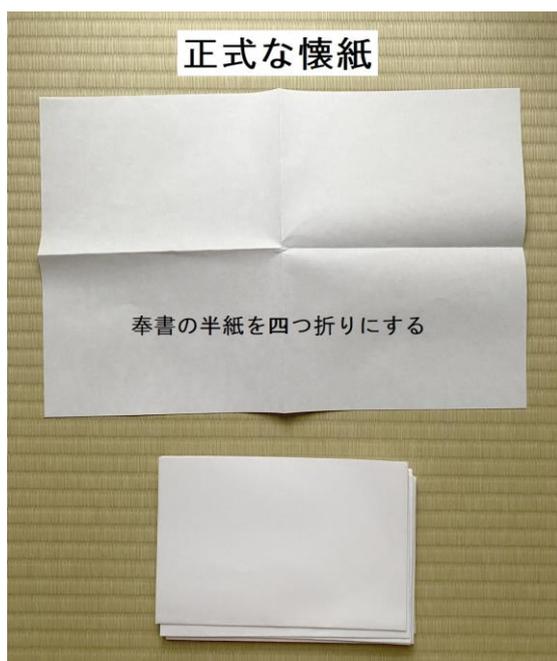
ただ、現在ではこの懐紙は市販されておらず、用意するのが大変なので、お稽古や常の茶会では一般に市販されている懐紙を使えばよいです。

なお、もしこの正式な懐紙を使うのであれば、ワサ(折り目)が下・奥になるように懐中し、菓子など取るために居前に置くときはワサが自分の方を向くように置きます。これは市販されている懐紙でも同じです。

ただ、お菓子をのせるときは、市販されている懐紙ならば全体を半分に折り返して使いますが、この正式な懐紙は四つ折りなので、上の一枚を斜めに折って(四つ折りなので自然と斜め折りになる)、その上に(二枚目の表と一枚目の裏に)お菓子を置きます。

お客でお茶席に入る場合は正式な懐紙では不便なので、市販の懐紙で構いません。

着物を着ている時は、正式な懐紙を懐中してチラッと懐から懐紙が見えるようにすると良いでしょう。(市販の懐紙では小さくて、懐中したらチラッと見えない)

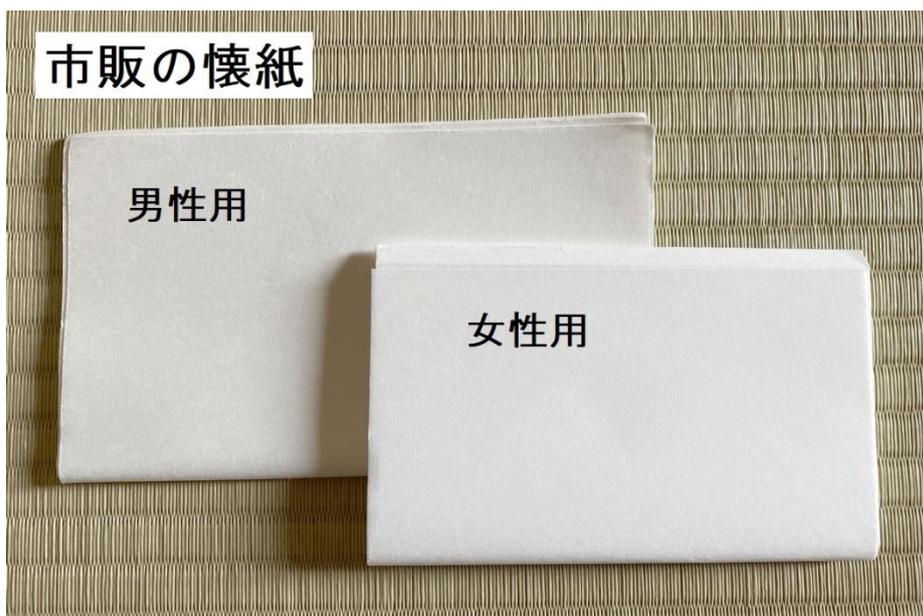


《市販の懐紙》

茶道具屋だけでなく、お茶屋(茶舗)でも売っています。

これは四つ折りではなく、二つ折り(半分)になっているだけです。

大きめの男性用と小さめの女性用とがあり、男性用は武士が使っていた正式な懐紙よりは小さいですが、女性用は昔からだいたいこのサイズです。



着物の場合は、必ず懐紙を懐中します。

一帖そのままを懐中します。枚数の少なくなったペラッペラの懐紙はみっともないので、できるだけ新品の一帖そのままを懐中するようにしましょう。

女性は女性用のものを胸元に、ワサ(折り目)が下になるように(これは男女共通)、そして3分の1くらい見えるように出して、真横に懐中します。



菓子など取るために居前に置くときは、ワサが自分の方を向くように置きます。また、半分折りなので、上下とも一枚目の紙なわけですが、一枚目の下の紙を上に戻して、懐紙の束の上に一枚目だけ裏向きにのっている状態にして、その上に菓子をのせます。

菓子を食べ終わったら、一枚目だけ外して袂にでも捨てます。

もっとも、菓子で湿るので一枚目を折って二枚重ねにするんだ、という説があるので、干菓子や湿らない菓子なら、わざわざ二枚重ねにする必要はないようです。逆に、一枚目の表面は汚れているから二枚重ねにして裏面を使うんだ、という人もいますので、気になるなら干菓子でも二枚重ねにすれば良いです。

懐紙は着物なら懐中し、洋装なら下座の方に置いておきましょう（たいてい懐紙入れに入れた状態で置きます）（ジャケット等を着用していて内ポケットがあるなら、懐紙入れは使わずに内ポケットに入れておくのがよいでしょう）。

そして、お菓子を取る直前に懐紙を出し、菓子を食べたらすぐ仕舞います。お菓子が運ばれてもないのに懐紙を出していると、「待ち切れない食いしん坊」みたいでみっともないですし、お菓子を食べ終わったのに懐紙を出したままだと「もっと食べたい食いしん坊」みたいで見苦しいです。

懐紙は男女別だけでなくさまざまな種類が売っていますが、白の無地のものが一番無難です。

手漉き越前奉書で作った厚手で乳白色の最高級品もありますが、一般に売られているのは漂白パルプで作った機械生産品です。基本的に、ハリがあって厚いものの方が高級です。絵柄のついた懐紙もありますが、濃茶などのフォーマルな席では相応しくありません。

あと、硫酸紙というツルツルの紙で作った懐紙もありまして、ベトベトの水餃子を食べるときなどに便利ですが、お茶碗を拭いたりするときに硫酸紙だけでは困るので、必ず普通の懐紙も携帯しておきましょう。

③扇子

いわゆる茶扇子というもので、扇子と叫ぶと、パタパタとあおぐことは全くなく、開くことすらほぼありません。挨拶をする時に結界として前に置いたり、歩くときに威儀を正すために手に持ったりする程度です。

ほぼ使わないので、無くても大した問題はないのですが、無いと非常に気持ちが悪い(落ち着かない)という変なアイテムです。

★とにかく、茶扇子でパタパタあおぐことのないようにしましょう。

《扇子の種類》

サイズは6寸～6寸5分(20センチ弱)のものが一般的で、5寸ほどの小さいサイズもあります。6寸以上あると女性用の懐紙入れに入らなくて不便だとよく聞くので、女性は5寸ほどのもので問題ありません。

親骨が白竹のものとは黒塗のものがあり、本来はどちらでも良いのですが、たいていは安い白竹ものを買って、稽古を続けていくうちに初釜や免状取得の祝いに家元や先生から扇子を贈られて、それがたいてい黒塗なので黒塗扇子を使うようになる、という例が一般的です。

もちろん自分で季節に合わせたお気に入りのものを購入してもよく、例えば京都の宮脇売扇庵で琳派風の華やかな紅葉の絵の茶扇子を買っておいて、晩秋の茶会に持っていったりすると気分が良いものです。(扇子を開くことはほぼないのですが)

もっとも、扇子屋に行っているいろいろ選べるのは女性用の話で、男性用はバリエーションがほぼ無いのでつまらないです。

なお、男性は着物であれば帯の左脇に扇子を挿します。洋装であれば懐紙入れに入れておくかジャケットの内ポケットにでも入れておきます。歩くときは右手に持ちます(扇子の先が自然に下を向くように)。茶席内で着座する場合は左脇には挿さず、右横か後ろに置いておきます。

女性も着物であればやはり帯の左脇に挿します。洋装であれば懐紙入れにでも入れておきます。以下、男性と同じです。



ちなみに、茶席で扇子を開くことがあるとすれば、熨斗袋に入れたお金を誰かに渡すさいに、扇子を開いてそのうえに載せて渡すときくらいです。

扇子は全部開けきらず、八分目くらいあけて、要(かなめ)を自分の方に向けて熨斗袋などをのせ、渡す相手の前で扇子ごと要を相手の方に向けて渡します。渡された相手は、熨斗袋などを取り除けて、扇子を開いたまま持って鑑賞し、見終わったら扇子を閉じて相手の

方に要を向けて返します。

※茶扇子で熨斗袋などを渡すのは、略儀の略儀です。正式には盆(切手盆)にのせて袱紗(茶道用の帛紗ではない)をかけて渡し、盆がない場合は袱紗に包んで(のせて)渡し(結婚式の御祝儀を渡す等で今も残っていますね)、更に略式が扇子にのせて渡す、です。

④菓子切

菓子切はあってもなくても良いものではありませんが、端午の節句の粽(ちまき)などは菓子切がないとモンキーイート(猿がバナナを食べるときの食べかた)をせざるを得なくなるので、やはり持っていたほうが賢明です。

ただ、茶席に金属系のもはご法度なので(うっかり落としてお道具を傷つけるといけないので)、象牙や鼈甲の菓子切が最良です。が、今ではそんなものはまず売っていないので、金属系の菓子切を使うしかありません。

うっかり落としても良いように、菓子切入れも一緒に購入しておくといいでしょう。

⑤懐紙入れ

懐紙入れとか帛紗挟みとか言ったりしますが、本来は全然別物で、懐紙入れはまさに懐紙を入れるもの、帛紗挟みは帛紗を挟むもの、です。懐紙入れに帛紗は入りますが、本来の帛紗挟みは画像の通り懐紙が入る余地は全くありません。



いまは本来の「帛紗挟み」は全く出回っておらず、一般に市販されているものは「帛紗挟み」という名称が付いていても、懐紙も入る「懐紙入れ」ばかりです。なので、「帛紗挟み」でも「懐紙入れ」でも、どちらの名前が付いているものでも購入・使用して構いません。

形状・材質は本当にさまざまですが、「綴れ織り」のものが丈夫で長持ちするのでお薦めです。綴れ織り以外の、金襴や緞子の布が張ってあるものは（画像右下のものなど）、見た目はいいのですが、特に角のところからすぐ傷んでしまうので、少々高くても綴れ織りのものがベストです。

女性の場合は、懐紙入れのほかに「数寄屋袋（すきやぶくろ）」という袋を持っているのをよく目にします。懐紙入れよりもずっと大きいので、着物のさいに懐中できない小物（財布とか）を入れて持ち歩いているイメージです。

これも色や柄など様々で、特に規定はありません。

ただ、男性が数寄屋袋を持ち歩いているというのは、和装・洋装に限らず見たことはありません。



《数寄屋袋》 懐紙入れよりも大きいので、懐紙入れを入れておく場合もあり